

編集を終えて

中村梧郎

藤田君・森住君のふたりから、撮りつづけた写真を「二冊にまとめたい」という相談があったのは、沖電気が解決して間もなくのことであった。私は一も二もなくその「編集まとめ役」を承諾した。

執念というものがドキュメンタリー写真家に不可欠の要素だとすれば、これはふたりとも人一倍である。そのうえ主題は「日本を震撼させた」沖電気争議。こちらも写真家であるが故に、キャラクターの異なるふたりの、一枚一枚の写真に目を通すのは楽しみな作業であった。セレクションを進めながら、二〇年も前に私自身がある争議団の一員であったことの記憶が、画面からまぶさまぶさと蘇ってきたりもし、鳥肌のたつような思いもさせられたのであった。

「沖電気と比べるとそんな争議団イメージはもう古いや」と、思いもよらなかったアナクロぶりをからかわれつつ、それにしても深いところで日本の現代史とかかわっていた沖電気闘争というものの写真記録を、こうして編集し終えることができたのは、役わりとしては幸せなことであった。頁数の制約や意味あいのダブリから、泣く泣くボツにした写真にも良いものがあつたことをまずはつけ加えておきたい。

人間の尊厳をふみにじって攻撃を加え、隷属を強要するのは侵略戦争の論理でもある。しかしベトナムはすでに勝ち、沖電気の争議団はこのキナ臭い時代のただ中で勝った。蟻は象を整せる。このロジックの巨大さは、言葉であらわしきれはしない。長い闘いの歲月

であったというのに人間の、働く者の力というものを優れた写真に記録し、表現し遂げた藤田君・森住君のふたりに、心からその労をたたえてあげたいと思う。争議の当事者ではなくとも、ふたり共に、今はやはり「たたかつてよかった」という心境であるにちがいない。これほどに全面的で奥深い記録を擁した労働争議写真は、あとにも先にも出ないのではないかとさえ思う。確実な歴史の証言である。

争議団への私からの敬意は、あえて言うまでもない。「闘いぬいた人びと」は、私の胸の中ではすでに神格化されてしまってもいるからだ。

一九八七・六・三

(インドシナ取材の準備をしつつ)